

本論文は、16世紀ならびに一部は17世紀に属する叙述史料を用いながら、オスマン朝の文化的選良層と西欧人旅行者、および庶民という三者が抱いたイスタンブルの都市イメージを明らかにし、社会史・心性史の視座からこの都市の特徴である歴史的重層性を抽出しようとする都市文化史研究である。

ここで言う「叙述史料」とは、徴税台帳や判決記録などの「文書史料」、あるいは宮殿やモスクなどの「建築物」に対立する概念として、おもに歴史書や旅行記などを指して（古典詩を中心とする「文学史料」も含めて）用いられている。16世紀という時代を対象としたのは、この世紀のスレイマン1世の治世（1520-66年）にオスマン朝の国家制度やイスタンブルの都市景観の原型が整備されたことによる。「西欧」とはヨーロッパを東西に分けた場合の西側、すなわち現代で言う西欧（フランス、イギリス、ドイツなど）や南欧（イタリア、スペインなど）を含む包括的な概念である。また「都市イメージ」は、都市に関して人々が文書に散発的に書きとめ、一定の定型性・共通性を持つに至った印象ないし心象風景——ドイツの文藝批評家クルティウスが言うところの「トポス」の前段階——と定義される。

論文は「はじめに」「おわりに」を挟んで、「序論」、本文の全四章、それに「結論」からなり、凡例・地図・表・文献目録が付されている。全体の分量はA4判で139頁、本文・注のみの合計（空白を含む）は400字換算でおよそ400枚相当である。

「序論」ではまず、社会経済史的研究と文学史研究とが乖離していた従来の状況に鑑みて、本論文の目標は叙述史料・文学史料に依拠した社会史研究に置かれる旨が宣言される。続いて、検討の対象となった三種類の都市観察者と主要史料の概説が行なわれる。それによれば、本論文が依拠するのは、①古典文学の素養を持ち合せた文化的選良の視点を代表する16世紀の文学史料として、ジェマーリー、ファキーリー、チャーティブ、ジャフェル・チェレビー、ヤフヤー・ベイ、ラティーフィーの六人の都市頌歌と、ファキーリー、サーフィー、アーリーらの当世批判の作品四点、②西欧人旅行者の視点を代表する史料として、1544年から1550年にかけてイスタンブルを訪れたフランス王国大使ダラモン男爵一行の旅行記七点、および補助的に16世紀後半から17世紀にかけてのパレルヌ、テヴノ、グルロ、モトライユらの東方旅行記数点、③自らの記録を残さなかった庶民を代弁する17世紀の史料として、市井の名士とも呼ぶべきエヴリヤ・チェレビーの『旅行記』と、アルメニア人エレミヤ・チェレビー・キョミュルジュヤンの『イスタンブル史』の二点という、大きく三つの範疇に分類される史料群である。

第一章「16世紀イスタンブルの概要：本稿の研究対象地域」は、1537年にスィラーヒーによって作成された都市図を利用しながら、議論の前提条件として、三種類の観察者たちが共通して取り上げているイスタンブルの地勢、主要地域、建築物などを概観する。続く第二章「文化的選良の都市イメージ」では、古典詩人の作品におけるイスタンブルが「理想の都市」と「下郎の巷」という、雅と卑の対立的構造のなかで把握されていたさまを明らかにする。詩人たちは都市頌歌のなかで、ボスフォラス海峡、ハレム庭園、アヤソフィア・モスク、ファーティフ・モスク、聖地エユブ、キャウトハーネ、ガラタという七つの地理的対象の称揚を通じ、詩的美意識に則った理想の都市としての帝都を描き出す一方、当世批判の諸作品においては、紳士たる雅人の価値観

にそぐわない卑しい庶民が暮らす、悪徳と不潔と無礼さに満ちた現実の日常生活空間を侮蔑的・揶揄的に描写しているという。

第三章「西欧人旅行者の都市イメージ」は、ダラモン大使一行の旅行記群のなかから、「現代的異文化の都市」と「異教・キリスト教古代文化の都市」という二つの都市イメージの併存を導き出している。彼らは一方で、「トルコ帝国」の敵情視察という実地検分を行ない、トルコ兵の静謐と秩序、ハレムの東方的豪華、奴隷売買や割礼などの習俗の観察を通じて、イスタンブルを強大で豊かな野蛮人の都として描き出すと同時に、他方では人文主義的関心から、ローマを想起させる七つの丘やアト・メイダヌ（ビザンツ帝国のヒッポドローム）、アヤ・ソフィア（古代の教会からの改造モスク）といった建造物、入浴や油相撲などの習俗を重視し、そこに異教・キリスト教古代文化の痕跡を探し求めようとする。ここでは、同時代の異文化への興味と古代文化への憧憬とが相補的に同居していることが論じられる。また、ヨーロッパ人による「現代的異文化」としてのイスタンブル像が、17世紀以降、個人的体験を重視する「幻想的異文化」の都市像へと継承され、変容してゆくという見通しも示される。

第四章「イスタンブルの庶民の都市イメージ」では、17世紀の二人の庶民的名士による旅行記的地誌に見られるさまざまな俗信が取り上げられる。この章のみ17世紀の史料に依拠するのは、対応する類似史料が16世紀にはまったく存在しないことによる。アヤズマ（聖なる水場）や聖人エユブの伝説といった宗教的俗信、でか鼻メフメト・チェレビーや篩翁など同時代の狂人に関する俗信、アヤソフィアやアト・メイダヌの「奇物」（奇妙な建築物ないしその装飾品）、コンスタンティヌスとテオドシウスの円柱などの遺構にまつわる歴史的な俗信という、三種類の俗信を検討する過程で立ち上がってくるのは、日常生活のなかの奇異な事象から不可視な力への畏れを感じ取る庶民の「迷信的生活意識」であり、「俗信の都市」としてのイスタンブル像である。

最後の「結論」では、これまでの議論を踏まえた上で、三種類の観察者によるイスタンブルの都市イメージ群の最大の特徴は、それぞれが交わることなく併存するという多元的構造にあることが示される。このような状況を本論文は「多元的都市イメージの場」と呼んでいる。この多元性の起源として挙げられるのが、既存の異教の建築物を排除せずに再利用する形で進められた都市建設のあり方と、異教徒の精神的領域にまで立ち入らないオスマン朝の柔らかな支配体制である。これら建築的・社会的要因によって観察者と観察対象の多元性が保証された結果、三種類の観察者はそれぞれの文化的背景に応じた独自の観察を行ないながら、同時にいずれもがその対象の歴史的層性を感知する点で共通する態度を見せることになる。

こうした構成と内容を持つ本論文の特徴としては、筆者が卓抜な語学力を生かして韻文と散文とに跨るオスマン語史料を駆使するとともに、ヨーロッパ諸語の一次史料をも幅広く渉猟し、さらに現代トルコ語・ヨーロッパ語による社会経済史・文学史の研究成果にも十分な目配りをしていくこと、性格の異なる膨大な史料群に鏤められたイスタンブル像を整理し、三種類の観察者の独自性と共通性との分析から、歴史的層性を持つ都市の多元的イメージを抽出してみせたことが挙げられる。16-17世紀という時代に限ってみても、イスタンブルの都市イメージをこのように包括的・統合的に叙述した研究はこれまで存在しなかったので、本論文は都市文化史研究の分野において基本的な新知見をもたらした労作と見なしうる。また、トルコ文学作品を社会史研究に応用する試みとしても、トルコの内外を問わず先駆的業績に位置づけられよう。全体は、読者が通読しやすい簡潔な文体で記されている点も特筆すべきである。

ただ、本論文にも望むべきいくつかの問題点が残されている。審査委員からの指摘を若干紹介するなら、まず史料の網羅性、事例の代表性という点で、ダラモン大使一行の記録その他数点の

みを以て「西欧人旅行者」の旅行記一般を代弁させているのは不徹底であり、より広範囲に、さまざまな文化的背景や社会階層に属する旅行者たちの記録を精査すると同時に、実際に現地を訪れていない人々が旅行記や文学作品を通して間接的に生み出した「都市イメージ」をも問題にすべきであろう。また、社会史・心性史の視点の導入を意図している割には「心性」そのものの分析が不十分であり、論文は全体として分析よりは列挙に力点が置かれる傾向にある。第三に、三種類の観察者の分類にはやや恣意的な面が見られ、そこから得られる結論も、事前に予測されうる常識的な範囲にとどまっている。さらに「俗人的聖職者」「庶民的名士」「帰納的観察者」「定点観測」といった、分析概念にまつわる言葉の使い方にも再考の余地がある。

しかし、これらは本論文の意義や貢献を否定するような性質のものではなく、その一部については筆者自身が今後の展望として「おわりに」のなかでも自覚的に述べているように、これからの研究の展開の過程で克服されるべき課題である。従って本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。